





# 目で見ると 作業所・活動ホームの 足あと

43 44 51 52 53 54 55 56 57 58 59

横浜援護授産所

- 空とぶくじら社
- いしずえ作業所
- YSK更生所
- 港北ふたば作業所
- 訪問の家
- ともしびの家
- 鶴見共同作業所
- 磯子はま作業所
- 港南ひまわり作業所
- かもめ福祉工房
- あけぼの作業所
- いずみ福祉作業所
- みなみ作業所
- つばさ作業所
- 朋作業所
- かながわ作業所
- ことぶき福祉作業所
- 地域作業所ダンボ

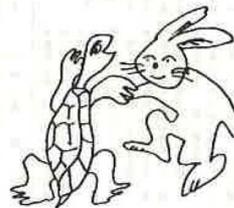
障害者地域  
作業所

「とわに ひびけ」

在援協十年の歩みから抜粋

- ほどがや希望の家
- いずみ会館
- 金沢福祉センター
- 中区本町活動ホーム
- 磯子区障害者地域活動ホーム
- ふれあいの家

障害者地域  
活動ホーム



シンボルマーク  
あれこれ

広報部からのお願い

(一)「障害者の明日を考える集い」  
いかがでしたでしょうか。今年も良い集いが出来たと思えますが、担当者やスタッフには気づかない点などもあるかと思えます。今後に向けてより良い集いのために、所員、利用者の立場からの意見、職員としての意見など、どんな事でも結構です意見をお寄せ下さい。

(二)当誌40号記念として小特集を組んでみました。特に昭和四十年五十年代に開所された作業所の苦勞話しや、思い出、又作業所連絡会結成時のお話などありましたら是非お聞かせいただきたいと思います。作業所・活動ホームの歴史を作ったゆくり上とても大切なことと思えます。又、「兎と亀」に対するご意見、ご批判などもお寄せ下さい。

連絡先

市内・中区石川町五二一九

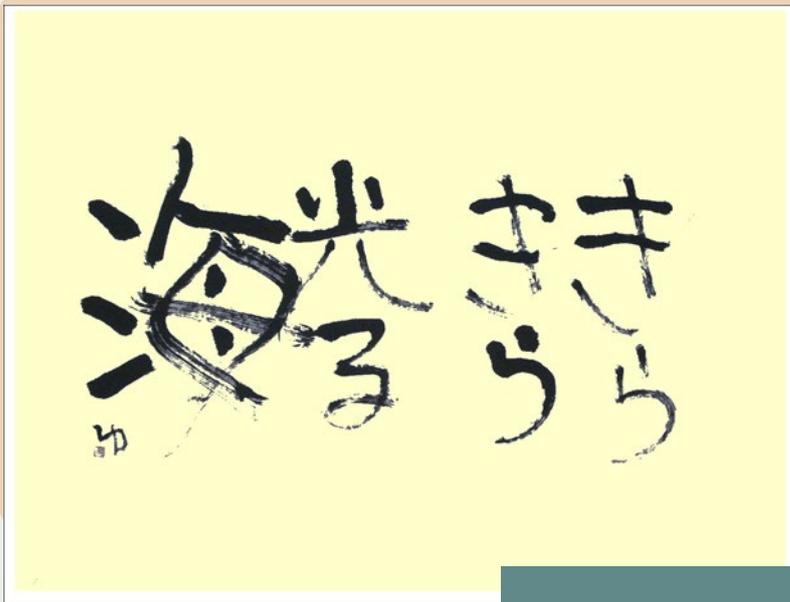
「シャロームの家」

T.F 二四三―六五八四

原木 哲夫

相模原の障害者が住む施設で元職員の青年の手による痛ましい事件がありました。昨晩、また、東北で大きな地震がありました。今時点で障害のある仲間たちがどうしているかという詳しい状況についてはわかっていません。海に向こうでは、戦争が起っています。私は、弱者を軽んじる風潮や暴論にも似た意見は、地道に障害のある方たちと仕事を続け、生きること淡々と応じるだけと思っていました。市作連は運動体です。「兎と亀」は、こんな時代だからこそ、休むことなく、声高に叫び続けなければならなかったのではと、反省しています。絶対に変わらず、日々変わり続けるため、私たちは、仲間に、社会に、これからも意思を伝え続けます。

2022年3月17日朝 広報部 原木 哲夫



自らの力に期待します  
1982年8月創刊号

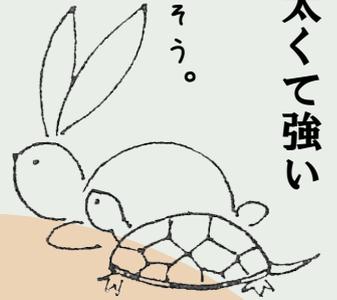
兎と亀がそれぞれの能力を発揮できる環  
境の中で競争し、助け合って共に生きる姿、  
これが障害者と健常者の共存していく姿で  
ありたいと念ずるものである。  
1982年8月創刊号

作業所の役割は何なのか。  
1986年11月 第10号

仕事をしている手はとてもやさしい  
1986年11月 第10号

市作連職員の束は太くて強い  
2018年11月 第98号

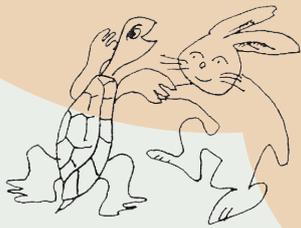
…途中の駄が可愛そう。  
2010年7月 第78号



### ホエムの 小部屋



詩・活動ホームしもだ  
大原友子



「彼」にとつての三千元  
1987年11月 第12号

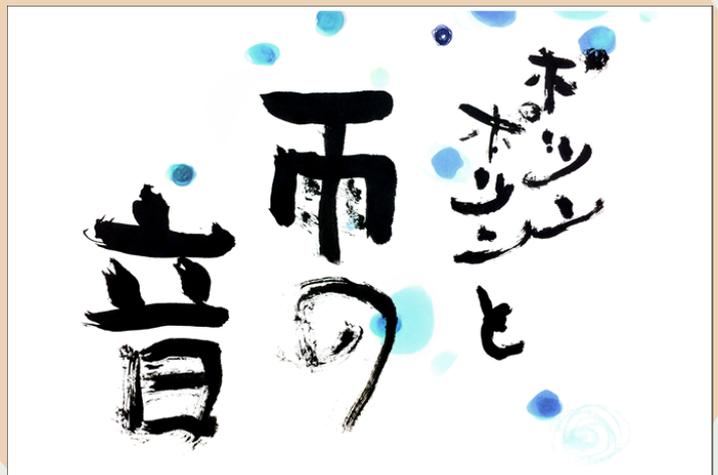
わたしたち抜きに、  
わたしたちのこと決めないで！  
2010年7月 第78号

障害福祉の未来を考える集いは、生まれ育った  
街であたりまえに暮らしたいという障がい当事  
者や家族の願いを広く市民のみなさまにお伝え  
するために開催されています。  
2015年4月 第92号

結婚するので退職します。  
2007年7月 第69号

作業所を通して利用者が働くことは「夢と希望」であり  
喜びを見出すことだと考えます。そんな環境作りと支援  
を心掛けたと思っています。  
2015年4月 第92号

今、市作連がなすべき事は  
何なのか。  
2007年7月 第69号





## 「事務局に聞いて みました」

横浜市障害者地域作業所連絡会には事務局があり、障害福祉事業所職員ではない専属の方が働いています。「免と亀」発行にも深く関わってくれる事務局の根本雅子さんとなかむらいづみさんに、市作連広報部、みどり福祉ホームの荒木がお話を聞いてきました。

**荒木**「とりあえず、これでも食べながら  
と思って(カバンから和菓子取り出  
す)」  
**なかむら**「わー、うれしい！」  
**荒木**「根本さんずいぶん長いですよ、  
私が役員になった時、(手元の免と亀  
バックナンバーめぐりながら)第54号  
2020年7月号に、荒木、新役員挨  
拶って記事がある、多分、20代だ。」  
**なかむら**「荒木さんにも20代の頃が  
あったんですか(笑い)」  
**荒木**「すごく痩せてたんだから。その時  
には根本さん、事務局にいましたよね、  
文明会長の時。根本さん最初から事務局  
だったんじゃないでしょうか？」  
**根本**「まさか、最初って1982年で  
しょ。そう、聞かれると思って調べてき  
ました(メモ取り出し、読む)私が事務  
局に来たのは今世紀初め、約20年前で  
す。激動の時代というか、運営費2%  
カット問題とか。」  
**荒木**「待って、56号、2003年、文  
明さんが中田市長！って記事巻頭に書い  
てます。」  
**根本**「小規模通所授産の家賃カット、自  
立支援法に異議を唱える全国大会、ふく  
まち条例の問題、最近では国事業に移行  
した事業所の家賃カット。」  
**なかむら**「まだ、継続している問題です  
ね。」  
**根本**「雪の中市庁舎を囲んでの抗議集会  
のことは忘れられません、ものすごい数  
の利用者・職員の手紙を横浜市に提出  
し、事務局でも大事に保存しています。  
思えば平和になったわね。」  
**荒木**「平和なんですかね、なんか平和  
じゃないような。」  
**根本**「曲がりなりに、職員に生活でき  
るだけの給料を出せるようになって。で  
も、平和な時代に運動体ってなかなか難  
しい。危機感の共有がしづらいついてい  
るか。」  
**荒木**「難しいです、世代による意識の差  
というか対行政とか社会でなく、職員対  
運営とか利用者・家族対法人とかになっ

ちゃうっていうか。」  
**なかむら**「ボランティアな感じが根っこ  
にある人とドライな感じの人両方いるよ  
うな感じがしています。」  
**荒木**「福祉畑じゃないところから来たな  
かむらさんにはそう感じられますか。な  
かむらさんは、いつから事務局でしたっ  
け？」  
**なかむら**「2007年、会長は谷口さん  
になっていました。事務局は上星川で、  
今は伊勢佐木長者町ですが、ここ一年半  
はコロナ禍でテレワークを続けていま  
す。」  
**荒木**「定例会もないし、ZOOMばっか  
りでももんね、こうやって直に顔を合わ  
せることもほとんどない。事務局と免と  
亀について聞きたいのですが。」  
**なかむら**「記事との関りは事業報告や事  
業計画、TEAM3の寄付金報告など  
で、広報部の人に聞かれたことに回答す  
るくらいです。それから発送作業をして  
くれる事業所に宛て先のシールを送った  
りもしています。」  
**根本**「あんまりないですね。広報部は独  
立した部会だから。」  
**荒木**「免と亀に関する意見とか。」  
**根本**「ほとんどないですよ、たまに名前  
が違ふとか。後、昔、多分年配の家族の  
方なんだと思うんだけど、グループホー  
ムのことばかり記事に載せるけど、私た  
ちは切迫してて、施設も必要って記事に  
書けて。」  
**荒木**「覚えてます、気持ちにはわからなく  
はないけど、運動体の市作連の広報誌と  
しては、むずかしい。後、ある事業所の  
不祥事が起こった時に、自分たちも気を  
つけなきゃという気持ちで私が記事を書  
いたんですけど、残されたその事業所の  
職員の気持ちも考えられて、利用者には  
と配慮ないよって、言われてみればそ  
の通りです。お褒めの言葉とかは？」  
**根本**「ないですね。」  
**なかむら**「ありませんね。」  
**荒木**「そうですね。」  
**根本**「記録ですからね、大事な、それに

対してどうっていうより静かに読んで  
ただいているというところですか。」  
**荒木**「そうですね、前の広報部の原木さ  
んも常々記録だからねって言ってまし  
た。コロナ後の広報誌ってどうなんです  
かね。」  
**なかむら**「やっぱり紙媒体がいいです  
よ、これ見てください(分厚い大きな封  
筒)、集いの市長への手紙で、利用者の  
方が絵を描いて、文字は職員の方がコメ  
ントを代筆したり、こういう想いはデー  
タでは伝わらないです。缶バッジコンテ  
ストも盛況ですね。」  
**荒木**「マジか、集いのYouTube  
も、当事者がってなると職員も気合が違  
いますもんね。」  
**根本**「運動体って、キーワードは当事者  
だと思ふの、当事者のこと真剣に考えれ  
ば、皆一致団結できるって昔も今も変わ  
らないじゃない。市作連は事業所の団体  
にならないで欲しい、当事者や家族やみ  
んなの団休であり続けて欲しい、当事者  
の生活を脅かすことがあればいざって団  
結し、ものすごい力を発揮するところが  
市作連の良さだと思う。」  
**荒木**「そうですね、バックナンバー読む  
と、当事者のボエムとか、お母さんたち  
の座談会とか、職員以外の記事が面白い  
んですよね。これから、若い職員と一緒  
に、当事者の記事も増やしながら続け  
ていきます。なんか励まされちゃった。」  
**なかむら**「和菓子、おいしかったです、  
ごちそうさまでした。」  
**根本**「続けてください。」  
**荒木**「後継者見つけます、本当に今日は  
ありがとうございました。」



# 「兔と亀」100号を作るにあたり、市作連広報部みどり福祉ホーム荒木とほぼ同年代、普段から気になっているお2人と『兔と亀』を一緒に読みながら、色々な話をしたいと真っ先に思い、集まっていたきました。



秋の夕暮れの西ひかりが丘団地の商店街、閉店間際の喫茶カプカプに、マスター鈴木励滋さんを訪ねました。戸塚障害者地域活動ホームしもごうの甘糟直行さんは一足早く到着、バザーコーナーでズボンを購入し、ホットコーナーとパウンドケーキ注文していただきました。

**荒木**「すみません、遅れました。あっ、アイスコーヒー下さい。」  
**鈴木**「どうも、いらっしやいませ。今日はどんな感じで話すんですか？」

**荒木**「(分厚いファイル数冊、ドン)ざっくばらんに。過去というよりか、今を、そして希望を。」  
**甘糟**「希望か。そもそも、作業所、もうないじゃん。」

**鈴木**「いつなくなっただけですか？」  
**甘糟**「2年前かな。市も、作業所の葬式すればよかった、盛大に、ありがたう、歴史的意義はあったって。」

**荒木**「たしかにね。で、『兔と亀』、改めて読んでみて、気になるところありましたか？」  
**甘糟**「読んできたよ。10号1986年の研究部の課題①雇用確保②定着率③専門性、今も変わらな

い。作業所できたの70年代後半でしょ。15年以上たった1992年25号、やっと市が地域作業所を社会資源として認めたって記事。しかも、たった2年後の1994年31号、補助金増額が鈍って、右肩上がり終了。そして2003年56号では中田市長の運営費2%カット。」

**鈴木**「国家公務員の給与の基準が下がった人事院勧告を根拠に。人件費相当分だけじゃなく運営費全体のカットって、ひどい。大体、当時の作業所職員の給料は地方公務員のレベルにも全く達してないのに。」

**甘糟**「2005年の自立支援法で国事業も大きかった。運動でいえば、2000年の介護保険、障害系が他人事って傍観してたのが間違いで、それからは大な後退戦を戦っているってどうか。」

**鈴木**「そうでしたね。でも、初期の号を読んでると、障害のあるメンバーの環境をなんとかするんだ、働いている人の処遇を少しでもましなものにっていう、凄まじい運動の熱のようなものは感じますよね。」

**荒木**「読み物として単純に面白い。当事者の短歌とか、お母さんたちの座談会とか。」

**甘糟**「遠くの県のでっかいコロナー視察行って『すごいんだけどやっぱ違う』みたい。あと、作業所だから『お仕事』に拘った記述が多い、作業所なんだからちゃんと『お仕事』しなきゃみたいな。」

**荒木**「(ファイルめくりながら)しつけどか、指導とか、世話とか、先生論争とか、子供とか、叱るとか。」

**鈴木**「1997年にカプカプに勤めるまで障害福祉のこと知らなく

て、作業所って言われてもピンと来ないくらいだったから、メンバーの工賃の低さに驚いた。だから『仕事して工賃上げて』ってのは重要なのはわかるけど、仕事の質の話があまりされてない印象があった。」

**甘糟**「まずは事業の継続性を職員自身で保障するって感じだったのかもね。今こそ『お仕事』だけじゃない日中活動の在り方はとか、支援の質はという話をするべき時なんじゃない。」

**鈴木**「そうそう、市作連にさ、どうしても興味持てなくなった『事件』があったんですよ。」

**荒木**「なにに。」  
**鈴木**「中田市長のまさに『2%削減』の時、市庁舎内に陳情に行くからって呼びかけられて、メンバーとか職員とか家族動員して行ったのに、ドライプスルーみたいに市庁舎内を通り抜けただけ、なんか茶番感がたまらなかった。」

『お帰りはこちら』みたいに言われたけど、市長室行ったの。」  
**荒木**「入れてもらえたの!？」  
**鈴木**「もちろん止められたけど、『運営費下げないで!』ってデコレイトした手作りの大きなクッキー持ってってたから、『みんなで作りました、これだけは渡してください』って、それだつて茶番なんだけども、どうせやるならねえ。」

**甘糟**「やっぱさ、運動って一種プロレス的ところがあるんじゃない、本来組み合って様子をみてさ、プロレスはストーリーで、市作連はその物語作りが出来ればいいんだろうけど、なかなかそこまで。」

最近の市はいきなり投げ捨てジャーマンみたいな感じで物語にのってきそうもないし。」

「これバグの種を撒いてみた」

**鈴木**「団体交渉とか陳情型の運動だけではダメなんじゃない。」  
**荒木**「というところ?」  
**鈴木**「『地域』での地道なネットワークキングが大事なんだと思う。地域作業所から始まったわたしたちは、いかに地域コミュニティの一員となるかが勝負で、そこは大きい施設には難しいところかもしれない。」

**甘糟**「小さいところは意識的に外に出ようとしてきたし、繋がらざるを得ないし、そこが強みなんじゃない? 小さいところから社会を変えていけばいい。」

**鈴木**「地域ケアシステムを逆手に取ればいいんですよ。国の地域包括ケアもともと横浜市のケアプラザがモデルなのに、『我が事・丸ごと』なんて障害福祉も地域福祉に参画せよってお上から言われると、やらされてる感満載だけれど、もともとやっていた地域連携の取り組みなんて一切評価して来なかったのあなた達の方ですすよね?」

いたくもなる。」  
**甘糟**「そうそう。」  
**鈴木**「障害に限らずマイノリティが駆け込めるところとして町のあちこちに障害福祉事業所があるって、誰にとってもよいことだし、とても公共的な税金の使い方だと言える。」

「これからもよろしく、

「50歳くらいのおっさんたちが『兔と亀』99号一気に読み!」

家賃ぐらい出させてもらいますよ!」って横浜市に言わせる状況にしちゃうような具体的な実践を通して訴えていくのが、これからの運動なんじゃないかなと。」

**荒木**「障害事業所とケアプラの関係ってどう?」

**鈴木**「旭区ではケアプラと障害福祉事業所のお見合い会やったんですけど、2011年の震災がきっかけで。」

**甘糟**「俺は近隣のケアプラの運営協議会とかに入ってる、そこは意識的に食い込んでいこうと。」

**荒木**「旭区は孤独死があったのも大きかったんじゃない。」

**鈴木**「あれも2011年。『犯人捜し』みたいな心無い報道もあったけれど、みんなそれぞれの役割を果たしていたし、そもそも誰かのせいにして済ませるべきではない。でも、『地域連携』なんて言ってるのに何もできなかったという感覚は今でも残っている。それは、津久井やまゆり事件もそう。」

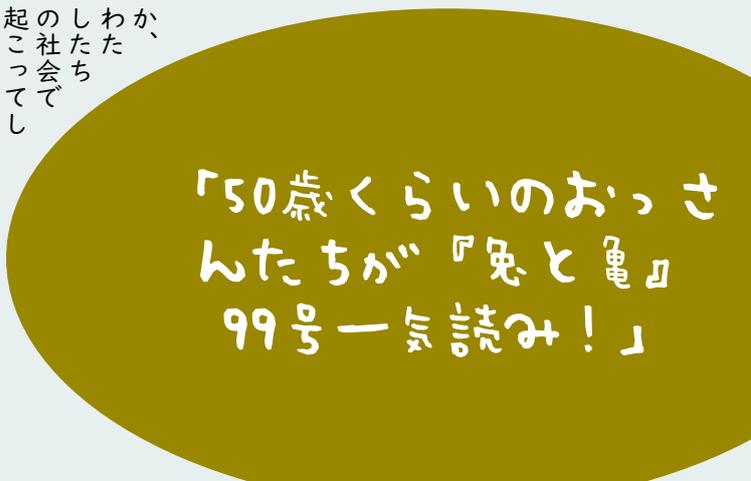
**荒木**「津久井やまゆりの犠牲者は、もしかしたら自分たちのメンバーだったかもしれないって。」

**甘糟**「自分事なんだよね。植松の変質というか、支援の質の話になるんだけど、環境ってさ、現場がこんなもんだと思えばあつという間に染まっていくっていうか。」

**鈴木**「だからこそ、施設はダメだって話して済ませちゃいけないんですよ。結局、障害、いや障害に限らず、人間一人ひとりを肯定することからしか始まらないんだと思う。」

**荒木**「植松がさ、カプカブにいたら事件は起こらなかつたっていう人いるじゃん、どう?」

**鈴木**「そういうことを言う人は、孤立死のニュースで『犯人捜し』をしかねない人ですよ。他人事じゃなく自分事として考えるとところからし



か、わたしたちの社会で起こってしまつたあの事件は超えていけない。植松さんがあんなことを思いつくような、障害がある人たちを否定する空気がわたしたちの社会にはあるわけで、それを変えられるのはその社会の一員である自分なのだと思つてほしい、他人任せでなく。」

**甘糟**「誰が施設を責められるの。対立じゃなく一緒に考えなきゃならない。運動の仮想敵はもう福祉局じゃない、財務からいかに引き出すかの理屈を一緒に考えた方がいいし。市作連の役割は政策提言だと思つて。」

**荒木**「小さい事業所の良さや強みの話でてるけど、コロナはさ、地域に開かれるとか、とにかく繋がるってところが、完全にリスクになった気がする。」

**鈴木**「正解がないから迷いますよね。甘糟さんとこは法人として命を最優先に随分通所を制限したつて聞いたけど、うちは、地域の人が拠り所に

してくれているお店も含めて、出来るだけ開け続けようって。そのためメンバーやスタッフ全員の送迎をしたり、お客さんも含めた健康観察をしたり。でも、今も迷ってる。」

**荒木**「そうだよ。どこもなにも教えてくれないし、自分で決めるしかなくて、所長も孤独だよ。」

**甘糟**「うちは職員に話を聞いて決めた。トップダウンじゃなくて現場の声が方向性に反映されるっていうのは小さいからできることなんじゃない。」

**鈴木**「反面、小さい事業所は現場で一杯一杯で、感染対策とか助成金情報とか、もっと出してくれたらありがたかつたかな。」

**甘糟**「市作連がメッセージを出し続け、アンケートを頻回にやるべきだったと思うよ。」

**鈴木**「(ファイイル手に取り)創刊号の兔と亀の名前の話、いいですよ。競走なんだけど、環境をフェアにして競走したらって。亀にもフェアな競走ができるようにブルドーザーで穴を掘って池も造っちゃえって。競うこと自体を否定するよりずっと健全。負けても人生が終わるわけじゃないって多様な価値を示しているのは、1982年の時点で相当先取りしてたんじゃやないかな。今の方が退行しているかも。飢餓感のようなものがすぐく伝わってきますよ。僕たちがその熱を知っている最後の世代なんじゃないかな。」

**甘糟**「その熱を受け継ぎつつ、昔のまんまのやり方じゃなくて、自分の運動を始めなきゃならないよね。」

**鈴木**「正しさを掲げる運動じゃ、もうないでしょうね。運動といえど、横浜なのに青い芝とのリンクが意外なほど『兔と亀』にはないんですね



**甘糟**「正しさとか、青い芝の会の話していえば、内田みどりさんの、『男たちは、障害者運動に夢とロマンをかけ、女たちは、日々の生活をかけた』っていう有名な言葉があった。」

**荒木**「冒頭に言おうとしたこと忘れてた! 思い出した。今ここにいる3人、全員、おっさん、大体50歳、男、所長、マジョリテイそろい踏み、俺が呼んどのいてなんだけど。」

**鈴木**「まさに重要なことなんじゃないですかね。日々の生活を蔑ろにしない運動の視点を、我々おっさんが学ばせてもらうためにも、出産や育児を支えられる職場にして柔軟な感覚の人たちに働きづづけてもらえるようにしないと。それどころか、子連れで来てもらえるんじゃない、わたしたちの職場って。」

次6100号に期待すべし  
「50歳のんが号誌くおたじみ！」

**甘糟** 「励滋さんがよく言う、揺さぶるってさ、まさしく共感じゃない。」  
**鈴木** 「ええ。今は『正しさ』ではなかなか揺さぶれない時代なのかなって思う。より多くの人を揺さぶるために、魅力的な実践で誘惑したいんですけどね。」

**甘糟** 「俺たちは、ラッキーにも、すごく近くに当事者がいて、日々、とんでもない化学反応みたいな現象を目の当たりにして、その驚きとかそういう現場にいられる喜びみたいなもの、伝えていきたいよね。」  
**鈴木** 「そう、方法としての運動の継承というより、運動の根底にある熱を次の世代に伝えていきたい。運動って、どうしようもない理不尽さが原点だと思っ。」

**甘糟** 「青い芝の会の横田さんも、運動を続けていく原動力は怒りではなく憤りだっけって言った。憤りと怒りは違う、憤りには義があるって。」  
**荒木** 「俺なんか、怒ってばっかで、高血圧。」

**甘糟** 「改めてそこを言語化して、アピールするのが市作連の役割なんじゃない、義と憤りには拘りつつね。」  
**鈴木** 「障害だけじゃなくこんな社会に生きる誰にもある生きづらさを問い直せたら、そこに共感が生まれるんじゃないかも。」

**甘糟** 「青い芝から、ピーチエア、来宮駅まで、突撃型で炎上して、変わって来る部分は確かにある。納得より共感って言い切っているのかという迷いもある。運動は楽しい方が長続きするし、憤りを若い人にダイレクトにぶつけてもね。自分たちのやっている豊かさを打ち出すことで理不尽を覆せるかもしれない。」

**荒木** 「やっぱ、俺たち世代が毎日楽しく自由に自転車乗って職場通って踊り続けなきゃね。」

**甘糟** 「俺も利用者のみんなと一緒に毎日踊ってるよ。AKBとか。」  
**荒木** 「先輩たちの派茶減茶でいきいきとした姿みてなかったら続けてこれなかったし。究極の職員育成じゃない？」  
**鈴木** 「日常的な実践を楽しく魅力的に。先人たちの熱を受け継いで、明日からもブレずにつづけて行きましよう！」

**荒木** 「同世代の尊敬できる他事業所の仲間の存在、やっぱ大きかった。今日はありがとうございました。すごく楽しかった、これからも一緒にお願ひします。『兔と亀』も市作連も。」  
**鈴木** 「300円(荒木『ん?』)アイスコピー代。スタンプカード、有効期限ないからポイント貯めてね！」  
**甘糟** 「ごちそうさまでした！」

**甘糟** 「俺も利用者のみんなと一緒に毎日踊ってるよ。AKBとか。」  
**荒木** 「先輩たちの派茶減茶でいきいきとした姿みてなかったら続けてこれなかったし。究極の職員育成じゃない？」  
**鈴木** 「日常的な実践を楽しく魅力的に。先人たちの熱を受け継いで、明日からもブレずにつづけて行きましよう！」

### 突撃取材！第1弾！ シャロームの家 原木哲夫様 インタビュ!

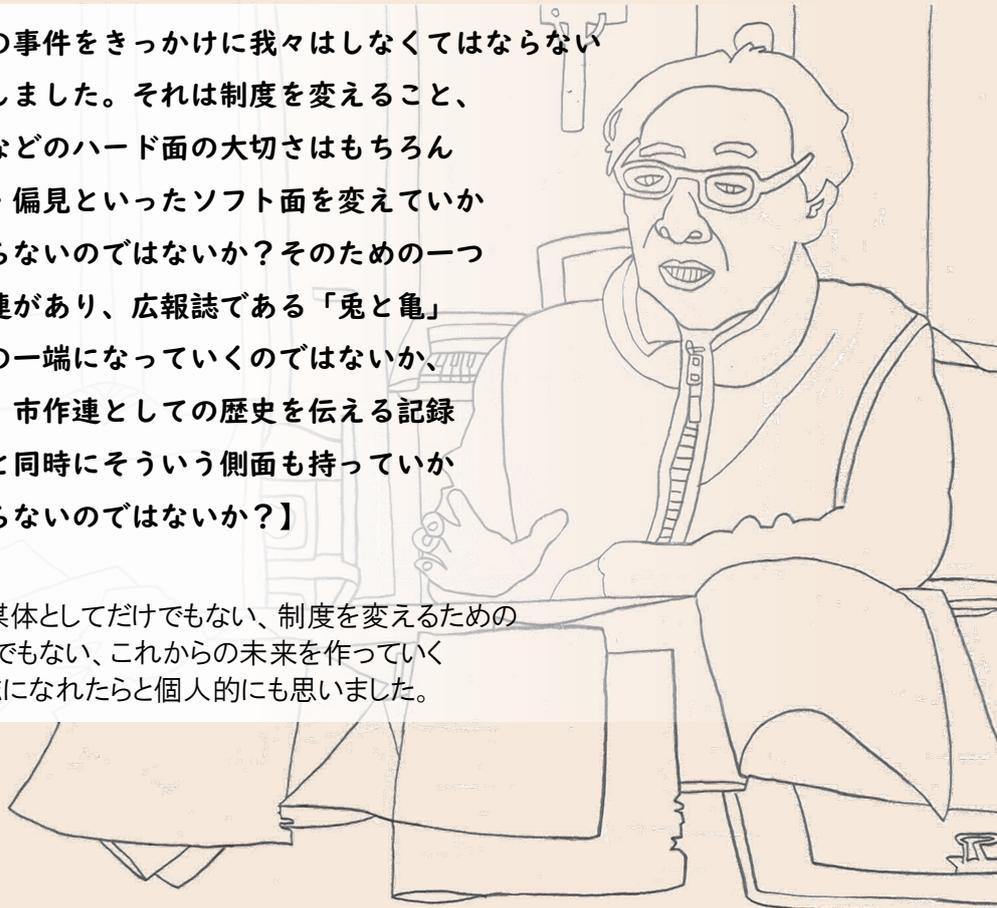
今回、市作連広報誌「兔と亀」の1000号を記念し、1996年の36号、89号、18年もの長い間、広報誌に携わって下さったNPO法人シャロームの家、統括施設長である原木哲夫さんにインタビューを行いました。運動体としての役割が大きかった市作連ですが、市作連の歴史を伝える媒体として「兔と亀」があり、その記録媒体としての役割を担っているとお話頂きました。

横浜市は1970年頃から障害を持った親御さん達と一緒に行き場の無い子供達の居場所として「地域訓練会」を作り、成人を迎えた方が通う場所を「地域作業所」として作り上げてきた歴史があります。その中で徐々に作業所の数も多くなり、知識や情報を共有するため、市作連という組織が成り立っていききました。当初は運動体として、横浜市の制度を変えよう！作業所を変えよう！という長い闘いを行ってきた歴史があります。制度も徐々に整い始め、今、この時代に「兔と亀」が担う役割、市作連の未来について原木さんの考えをお話し頂きました。

**広報部 伊東が突撃取材！  
若手が切り込む！**  
広報部3年目の伊東が今回、第1000号を記念し、市作連に長く関わる4名の方にインタビュを行いました。  
市作連の過去、現在、未来について、新型コロナウイルスを経て、変化したこと、小規模施設の未来などについてお話を伺いました。

【やまゆりの事件をきっかけに我々はしなくてはならない問題に直面しました。それは制度を変えること、整えることなどのハード面の大切さはもちろんだが、差別・偏見といったソフト面を変えていかなければならないのではないかと。そのための一つとして市作連があり、広報誌である「兔と亀」もその役割の一端になっていくのではないかと。市作連としての歴史を伝える記録媒体であると同時にそういう側面も持っていかなければならないのではないかと？】

歴史の記録媒体としてだけでなく、制度を変えるための運動体としてでもない、これからの未来を作っていくための広報誌になればと個人的にも思いました。



# 突撃取材！第2弾！ 障害者自立生活センター P.L.NEXT 渋谷治巳様 インタビュー

広報誌「兎と亀」第1000号を記念し、渋谷治巳さんにインタビューを行いました。渋谷さんは当事者として、市作連研究部の一人として30年以上も前から携わって下さっています。以上も前から携わって下さっています。そんな長い歴史を見てきた渋谷さんに過去、現在、未来についてのお話を伺いました。

**渡邊** 「今日はお忙しい中、貴重な時間をありがとうございます。早速ですが、お話を伺っても宜しいでしょうか？渋谷さんは市作連の一員として、当事者の一人として長く携わって下さっています。最初のキッカケは何だったのでしょうか？」

**渋谷** 「そうですね。当時は当事者の役員がおらず、当事者としての意見を言う人がいませんでした。市作連の立ち上がりから当事者の一人として関わったことがキッカケでしたね。当時の市作連は役員といっても当事者の親がほとんど役員といった状態でした。保護者の会、といった印象が大きかったです。」

**渡邊** 「市作連の役員として、当事者として特に思い出に残っているエピソードはありますか？」

**渋谷** 「横浜は行き場の無い我が子の場として親の世代が作業所を作ってきた歴史があります。当時は職員も身内が多かったのですが、職員を先生と呼ぶかどうかで大議論があったことが特に印象に残っていますね。」

**伊東** 「今は職員を先生と呼ぶ人はいないと思いますが、そんな時代もあったのですか？」

**渡邊** 「市作連の研究部としては思い出に残っているエピソードはありますか？」

**渋谷** 「横浜市との交渉をしに行った際に係長しか出てこなかった。横浜市との温度差を感じてすごく怒ったことがありました。やはり行政との考え方の温度差を痛感した事は今でも強く印象に残っています。」

**渡邊** 「この新型コロナウイルスの流行で生活が大きく変わったと思いますが、渋谷さんは当事者として一番の変化はどんなことだったのでしょうか？」

**渋谷** 「最初の緊急事態宣言の後、送迎車の人数制限やパーテーションを作ったこと、区切ったり、工夫をしましたが、長年やってきた朗読会の活動が出来なくなることが残念です。今も再開の目途は立っていません。昼食会や歌なども飛沫防止の観点から大きな制限があり、外に出られないこともストレスの一つになり、そういった声も多く耳に入ってきました。幸い、僕は当事者が経営に関わっていて長い付き合いのある事業所との繋がりがあり、サービスタとしては大きな影響はありませんでした。ただ、当事者を含めた研修会も中止となり、今までよりも当事者の声が届きにくくなった印象があります。」

**渡邊** 「うちの事業所でも親が入院して行き場が無い利用者がいて。コロナ禍でもあり、緊急受け入れ先を探したんですが、全然見つかりませんでした。病院からは2か月前に予約して下さいと言われた。病院としてもキヤパの問題があるんでしょうけど、なんだかなあと思いましたが。」

**渡邊** 「話は飛びますが、神奈川県としては津久井やまゆり園の大きな事件がありましたよね。やまゆりの事件から我々が学ぶことはどんなことでしょうか？」

**渋谷** 「差別とか優勢思想が大きく偏った結果だと思えます。ただ、程度は違

えど差別とか偏見ってみんな持っているんじゃないでしょうか？だからこそ人間って立ち返る必要がある。それが大事じゃないでしょうか？」

**渡邊** 「色々施設内部でも問題はあったようですが、小規模・中規模の施設は横の繋がりが薄く閉鎖的になりやすい。大規模の施設にしても法人内で完結してしまいがちです。小規模・中規模の事業所は今後、どうしたらよいと思えますか？」

**渋谷** 「小・中規模の施設は利用者の数も大規模に比べて少ない。だからこそ



渋谷治巳さん

利用者を近くで見ることが出来る。大規模の施設は利用者の数もそれだけ増え、全体を見ると一人一人の利用者との距離が遠くなりがちです。でも大規模施設は何かあった時に法人内でバックアップがしやすい。ここにメリット・デメリットがあり、ヒントがあるんじゃないでしょうか？」

**渡邊** 「ありがとうございます。では、市作連に今後、望むことはなんですか？」

**渋谷** 「横浜市独自の制度だったものが国事業に変わってきました。大きな成果ではありますが、半面、市としてはメリット・デメリットもあると思います。横浜市として良い面を残していけ

るよう、これからも話し合いの場を作っていくって欲しいと思います。計画相談の話も進んでいきますが、そもそも計画って自分で立てるものではないか？本当に当事者の声になっていくか、当事者の声をどう吸い上げていくか、そこが課題だと思います。自由や主体性が大きく取り上げられていますが、自由や主体性には責任が伴いますよ。責任を問われた時、最終的に当事者を守るのには制度だと思います。市作連として市に訴えていくことはもちろんだけど、時として国に訴えていく必要もあるんじゃないでしょうか？また、ハード面ばかりではなく、ソフト面でも変えていかなければならないと思います。ここからが始まりですよ。」

**伊東** 「最後にはなりましたが、1000号を記念して一言頂ければと思います。」

**渋谷** 「僕も当事者の一人として30年以上も関わってきましたが、65歳になり、介護保険の適用年齢になりました。一人暮らしも厳しくなってきたので、グループホームに入りたいと思うようになり、介護保険が適用されると障害系のグループホームに入ることが難しい。世代交代の意味も込めて若い世代の当事者にどう関心を持ってもらうか、どう関わってもらうか。そんな若い世代の当事者に向けて熱い広報誌になって欲しいと思います。」

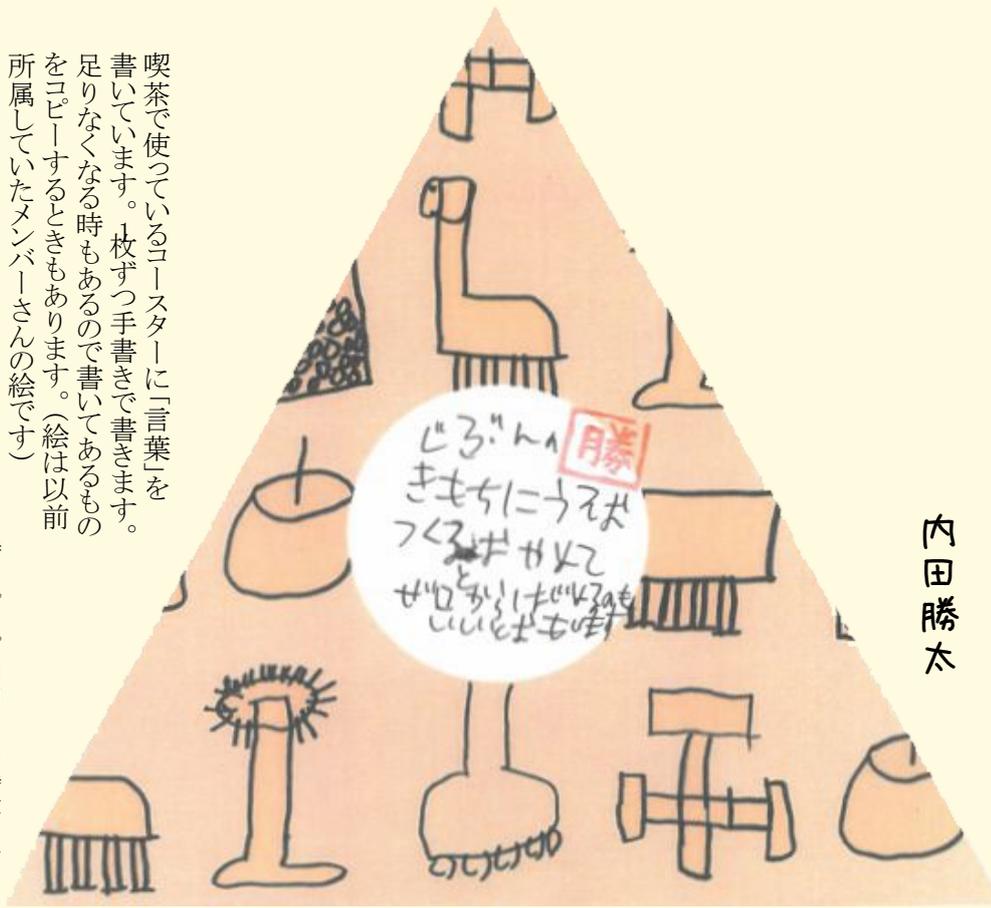
**伊東** 「ありがとうございます。若い世代の一人として、今後も頑張っていきたいと思います。本日は長い時間、ありがとうございました。」



# ホエムの 小部屋

“じぶんのきもちに  
うきおつくとおやめて  
ゼロからはじめるのも  
いいとおもいます”

内田勝太



喫茶で使っているコースターに「言葉」を書いています。一枚ずつ書きで書きます。足りなくなる時もあるので書いてあるものをコピーするときもあります。(絵は以前所属していたメンバーさんの絵です)

詩・カブカブ川和 内田勝太さん

広報部 伊東が突撃③  
市作連前会長・佐藤文明氏と  
現会長・谷口実氏  
に聞いてみた!

### ●市作連を振り返って

伊東「本日は貴重なお時間をありがとうございます。早速ですが、谷口会長は2014年から現市作連会長となり7年が経ちましたが、7年という月日を振り返ってみて思い出深いエピソードはありますか？」

谷口「そうですね。私が会長に就任した頃は今までの先輩達が無いものを作る、増やすという開拓してきた運動が収束しつつある時代ともいえます。障害者総合支援法が施行され、制度を利用する方が増え、ある程度、選べるようになってきました。選べるようになったといっても使いにくかったり、使える人とそうでない人の格差がありますね。本当に使ってほしい人が使っていない。また、会員も地域活動支援センターだけでなく、生活介護や就労継続型などに移行することで、制度が違ふということでも問題意識や課題が多岐にわたっています。そうしたなか、市作連の役割は何だろう?と悩みながらやっています。訴えても変わらないよね、と言われる。運動やデモみたいなものも今の時代に合わないというか、アレギー感みたいなものが増えてきているなかで、目の前のメンバーの暮らしをよくしたい、守りたいという想いは変わらず一緒のはず。そのために行けることをやってきました。私自身はリーダーシップをとるのが得意な方じゃないので、会長を薦められた

時には無理だと思いました。渋谷さんや石本さん、当事者の役員からの一緒にやりたい、やっていきたいという声の後押しがあって会長を引き受けました。」

渡邊「制度が整ってきたからこそ出てきた課題や訴えはありますよね。計画相談なんかでいうと、当事者からは自分のごとぐらいは自分で決めるよ、なんて声もあります。」

谷口「市作連の強みって渋谷さんや石本さんという当事者の役員がいることだと思ふ。」

伊東「当事者の意見って大切ですよ。見えない部分、当事者じゃないと分からない問題点ってあると思います。文明さんにお聞きしたいのですが、谷口さんに会長が変わったからの市作連の印象はどうでしょう?」

佐藤「論評するほど今の市作連に詳しくはないのですが、谷口さんは家賃補助の問題など課題に対して誠実に取り組まれているな、という印象があります。市長も変わったことだし、ぜひなんとかして欲しいなあと思います。僕としては家賃補助の問題なんかは、国事業への移行を市が進めたこともあり、二階に昇ったら梯子を外された、そんな印象を持っています。ちょっと酷いんじゃないの?って感じがしていますよ。引き続き、谷口さんには頑張ってくださいいなあ。」

伊東「家賃補助の問題もありますが、市作連として今後の方向性についてもお聞かせ願えればと思います。」

谷口「市作連は運動体としての役割があります。運動体としての役割は変わってはいけません。しかし、今までの



市作連現会長 谷口実さん



市作連前会長 佐藤文明さん

やり方では難しい部分もあります。集  
会やデモをやらなければならぬ場合  
もありませんが、行政と連携して制度を  
作っていく部分も大切にしたいと思っ  
ています。行政には施策提言だけじゃ  
なく、制度としてこれが無いと、とい  
う段階まで持っていかなければならな  
いとも思います。訴えの中身、イメー  
ジをきちんと理解して具体性を持って  
訴えていく。そういう役割を持ってい  
きたいと考えています。」

伊東「幸いなことに僕が結婚する時な  
んかは立派な仕事ですね、なんて言わ  
れはしましたが、まだまだ福祉のイ  
メージってマイナスの部分も大きいと  
思います。制度や仕組みの部分、ハー  
ドを整えることも大事ではあります  
より踏み込んだ形で差別や偏見のよう  
なソフト面も変えていければいいです  
よね。」

●やまゆりの事件から我々が学ぶこと  
伊東「福祉業界として、障害分野でい  
うと神奈川で津久井やまゆり園の大き  
な事件がありました。やまゆりの事件  
から我々が学ぶこと、学ばなければな  
らないことは何でしょう？お二人にご  
意見を頂ければと思います。」

佐藤「私は入所施設で4年働いた経  
験があります。でも私はあそこでは暮  
らせないと思って。自分が暮らせない  
ことを入居者に強いていたんだと。こ  
の仕事を50年ぐらいにたんと。自  
分はまだトラウマというのか。自分  
はここで暮らせない、だから自分だっ  
たらこうして欲しいっていうことを中  
で提案していた。決められた流れの中  
に利用者がいる、個人の選択がなかっ  
た。特に晩御飯なんか夕方の5時から  
なんだよね。夏に西日を浴びながら暑  
い暑いと言いつつながら食べる。若い人  
なんかは夜9時になるとお腹が空くよ  
ね。お菓子なんかをお客さんが持って  
きた時にそれをみんなに分けたりなん  
かして。それで他の職員なんかには  
よく怒られてた。

伊東「僕はやまゆり園問題にしても別の  
ことにしても、やっぱりそこで自分達  
が暮らせるのかっていう事を原点に  
欲しいなあ。重度の発達障害、行動障  
害の人達がいて、部屋をモニターで監  
視するみたいなの。もう刑務所と一緒  
だね。  
実際に中井やまゆり園に僕も行って  
みたんだけど、90人ぐらいの入所施

●新型コロナウイルスを経て今の施設  
の実態・在り方の変化について  
伊東「やまゆりの事件も大きかったの  
ですが、新型コロナウイルスの流行で  
障害福祉の分野は今まで以上の閉鎖感  
を生んでしまったと思っています。今  
の施設の実態や在り方の変化につい  
ても意見を頂ければと思います。」

谷口「我々だって差別や偏見がありま  
せん、とは断言できない。どこかで支  
援する側、される側と上下関係の意識  
が生まれてしまったり。でも一人一  
人って違う。人と人との関わりって障  
害があるなしに関わらずに難しいよね。  
施設入所にせよ、通所にしても、共生  
社会、地域で暮らしていくってまだ  
難しいことがたくさんある。地域で  
暮らせるはずなのに、障壁があつて入  
所や通所にいる方もいて。それで二  
次障害的な部分が出てきたり。大きな  
ことで痛ましい事件ではあつたけれど、  
やまゆりの事件でクローズアップされ  
た問題を変えていかなきゃならないよ  
ね。これからの人達がそうならないよ  
うに頑張らないといけない。」



状況で。行政とは週に一度は電話での  
やり取りをしてましたが、それでも忙  
しくて電話ができない時はメールでや  
り取りを行っていました。メールの返  
信が遅くなってしまう時もあり、現場  
の人達も市の職員達も本場に未知のも  
のと一所懸命闘っていたと思います。  
障害のある人の何を守るかを考えた時  
にやっぱり命を守らなくちゃいけない  
そんな中で外との隔絶を選択せざるを  
えない。施設にすら通えない、在宅で  
過ごさざるを得ない人もいました。在  
宅は在宅でサービスが使えるなくなっ  
たり、不安定になったりする人もいて。  
逆にそういう時だからこそ通所はやめ  
ない。受けなきゃいけない。そういう  
施設も中にはありましたね。それぞれ  
の思いがあつて、今まで一緒に出来た  
ことが出来なくなったりする中で、  
ちよつとした違いでぶつかってギスギ  
スする部分もありました。平日と休日  
でサービスの併行利用してた方なんか  
も併行利用の在り方まで問われたりね。

逆にコロナ禍によって広がりを見せた部分もあります。会議なんかはオンラインを活用して今まで繋げられなかった人達と場所に左右されずに繋げられるようになりまし。障害福祉の未来を考える集いもYouTubeでの配信になって、寒空の下に行かなくても参加できる、距離の問題や気候の問題で参加できなかった人達が参加できるようにになりました。今までは違う形で繋げられるようになった。それは障害のあるなしに関わらず、あるんじゃないでしょうか。

### ●これからの小・中規模施設の未来について

伊東「機能強化型地域活動ホームの連結連合が進んだり家賃補助の問題も出ている中で市作連として小・中規模施設はどうなっていくのか、意義や展開、市民や行政へのアピールをどう続けていくのか、ご意見を頂ければと思います。」

佐藤「障害者総合支援法でもなるべく施設を大きくしてスケールメリットを出していくよう政策誘導してみたいんだけど、私はあんまりそれには賛成できない。大きくなるとうしても集団が優先されてしまって一人ひとりが大切にされない傾向がやっぱりあるんじゃないかな。大集団になると決まり事が多くなって一人ひとりの意見が汲み取りにくくなってしま。例えば職員なんかも別の施設で違う教育を受けてきて、違う価値観で働いてきたりすると途中から意見を変えろって難しい。必ずしも良い面ばかりじゃないと私なんかは思うんだよね。幹部が育たないで組織を大きくするとゴタゴタの元になる。一つの組織を任せてもいい

いの幹部を育てるってなかなかね。そういう意味でも私個人は大集団になることには賛成はしていないんだけどね。

ただ、グループホームは別で。親が亡くなったたり、行き場の無い人のためには必要。親の苦境を見て見ぬふりをするのは精神的に厳しい。だから無理に組織拡大しても立ち上げてきた。谷口「国の流れは法人化だけど、仲間を守るっていう意味では大きくなって小さくても変わらない。大集団から小集団となつて、今まで埋もれていた人が良い味を出してきたりとか、今まで声を聞けなかった人達の声が聞こえてきたりする。小規模の優位性ってそこにあるんじゃない？」

ただ、人材難ってよく言われるけど小規模は雇用の部分は難しいよね。地域活動支援センターなんかは補助金が頭打ちで上がってないじゃない？給与体系を上げて元手が無いから払えない。人材を雇用しようにも小規模って経営的には厳しくなっていくよね。佐藤「大集団のメリットってやっぱり職員が有休も取れて、研修に行けるっていう体制が作れることじゃない？一か所単体だとなかなか難しいでしょう。職員が休めないような小規模施設は職員も疲弊するし、それこそ利用者の支援にも影響が出てくるんじゃない？絶対休まない！なんて根性論になっちゃうじゃない。」

やる気のない職員なんて辞めてもらってもいいんだけど、やる気があるて、利用者や慣れた関係性の出来た職員が利用者の前からいなくなるって利用者にとってはマイナスだよ。家族の安心にも繋がるし、やる気があるって利用者のために働いてくれる職員が長くいれるためにも働きやすさ、大集団の未来ってそういうことじゃない？」

### ●「兔と亀」100号記念に一言

佐藤「市作連ってなにかと言われたらやっぱり運動団体だと。障害を持った人達の未来が安心できる、していくための団体。そういう役割を担っているのが市作連。現場の利用者の声をしっかり反映させる。現場の職員の声を集めるのもいいんだけど、現場の声をどう汲み上げるか、それが市作連の活動の活性化にも直結していく。施設長、所長だけの運動にしてはいけない、私自身はそう思っています。」

谷口「現場の声を汲み上げるためにブロック懇談会なんかもやったりしていましたが、若手職員の意見で気付かされることもたくさんあります。それってすごい大切なあとだと思います。コロナが明けたらそんな集まりもしたいですね。運動団体って当事者、目の前の仲間の事を考え、その時々でやり方は変わっていくと思うんだけど、いつの時代も目の前の人の為に、を考えられる市作連でありたいと思っています。」

### 編集後記

過去、今、なにより未来にこだわった、100号になったのではないかと自負しています。以前からぼんやり感じていたことですが、今回、一番印象に残ったことは、いろいろな方のシンプルな思考と明るさのようなものです。どんな複雑になつていくこの現場と時代の中で、もう一度障害のある仲間や汗水ながしている職員の目線に立ち返り、シンプルに思考し行動することから、明るい未来は開かれる気がしてきました。いくつものインタビューの場はうっむくことなく笑顔で、緊張感はありませんでしたが楽しかったです。

す。兔と亀100号の編集に携わって、小さい事業所で障害のある仲間や職員たちと、多くの過ちやちよつとした達成の日々を繰り返すことの希望のようなものを、改めて感じています。東日本大震災や津久井やまゆり園事件や、新型コロナウィルス感染症や理不尽にも思える制度改正も、痛みや怒りは決して忘れず、絶望や諦めに陥らず、シンプルに立ち向かうだけなんだと強く思うのです。編集部 荒木

私は兔と亀59号から発行に携わらせて頂きました。改めて1号からを見返して、障害福祉の創成期から成長期の運動体の熱い力を感じました。なにがなんでもなんとかするという想いがありました。今、いろいろの制度やサービスが整っている中でも、それは過去に訴えてきたことが少しづつ身になってきたことだと思います。現場にいる職員のやるべきことは黙っては何も変わらない、「あきらめたらそこで試合終了です」の名言の通りだと思いました。伝えづづける事だと思っています。渡邊

コロナ禍もあり、ようやくの記念すべき第100号となりました。引き続き、先輩達からの想いを受け継ぎながら、関わっていかれたらと思います。伊東

発行人 神奈川県障害者定期刊行物協会 〒222-0005

横浜市港北区鳥山町一七五二

障害者スポーツ文化センター

横浜ラポール3階 横浜市車椅子の会内

〒231-0058

横浜市中央区弥生町2-15-1

ストークタワー大通り公園三

100号室 #6

電話：045-3334-7240

FAX：045-3334-7241

MAIL:sakuren@theita.ocn.ne.jp

編集責任者 谷口実